

インターネット大学における学生の授業の進め方と教職員の学習支援の実践

Students' Learning Progress and a Practice of Learning Support by Faculty and Staff in the Internet University

加藤 泰久

Yasuhisa KATO

東京通信大学 情報マネジメント学部

Department of Information and Management, Tokyo Online University

Email: kato.yasuhisa@internet.ac.jp

あらまし：高等教育における e ラーニングにおいては、ドロップアウトする学生をできるだけ少なくすることが大きな課題の一つになっている。そのためには、メンタリングを効果的に実施することが望まれている。インターネット大学の教職員による、学生へのメンタリングの実践について、学生の学習の進め方と共にその実践結果について述べる。適切なタイミングで適切なメンターがメンタリングを実施することによりドロップアウトの学生をできるだけ少なくすることを目指して実施している授業実践について報告し、今後の課題について述べる。

キーワード：メンタリング、e ラーニング、e メンタリング、インターネット大学

1. はじめに

日本においても人生 100 年時代を迎えると言われており、2007 年に生まれた子供の 50% が 107 歳まで生きると言われている⁽¹⁾。政府が「人生 100 年時代構想会議」を 2017 年にスタートさせ、何歳になっても学び直しができるリカレント教育の推進や、新しい高等教育の形態、新卒一括採用だけではない人材採用の多元化等の検討を既に始めている。文部科学省でも、“文部科学省「人生 100 年時代構想」推進会議”で議論を始め、幼児教育・私立高等学校の無償化だけでなく、高等教育の無償化、大学改革、リカレント教育の議論を行っているところである⁽²⁾。

このような中、社会人の学び直しについては特に通信制であるインターネット大学に対する期待も増加しているが、e ラーニングで学び続けるためにはオンライン学習者スキル⁽³⁾を身につける必要があり、特に学習を継続させる主な要因の一つである学習意欲については重要な課題のひとつとなっている。

e ラーニングの学習環境においては通学制の大学と違った様々な課題が指摘されている⁽⁴⁾。中でもドロップアウトに関する研究は多く行われており、早めの対応、メンタリングの必要性等が望まれている。e ラーニング環境におけるドロップアウトに関する研究から、ドロップアウトしやすい学習者の分析からの早めのアプローチ、講師のプレゼンス向上、ブレンド型授業による動機づけ、メンタリングによる学習支援などが実践されている⁽⁴⁾。本講では、ドロップアウトをできるだけ少なくすることを目的としたインターネット大学における実践の中で、学習者支援の観点からメンタリングに対するインターネット大学の取組の実践について述べる。

2. e メンタリング

e ラーニングにおける授業運営においてメンタリングは重要な役割を果たしている。これを e メン

タリングとよび、様々なメディアを活用して学習者に対する説明・指導・評価や助言・励ましなどが e メンターにより行われており、メンターが規範とすべきガイドラインの策定方法についても提案されている⁽⁴⁾。

英国のオープンユニバーシティでは、メンタリングに力を入れているが、約 60% がドロップアウトしており、そのうちの半分以上が、授業の開始時と授業の最初の課題提出時にドロップアウトしている。また、最後の期末試験までたどり着けば、ドロップアウトする学生はほとんどいないことが報告されている⁽⁴⁾。また、国内での実践も含めて、学習継続が不可能になる理由として最も多かったのが、「時間がない」ということで、メンターによる適切なタイミングでの適切な働きかけが重要なドロップアウト削減の解決策の一つであることも指摘されている⁽⁴⁾。

3. インターネット大学での学習環境

2018 年 4 月に開学した通信制の 4 年制大学では、2019 年は 2 年目にあたり、昨年度の経験を活かして、なるべくドロップアウト学生を減らす取組を実践している。本講では 2019 年度 1 学期（4 月～6 月）におけるインターネット大学の 1 年生へのメンタリングの実践について述べる。

調査対象とする大学は情報系の学部と福祉系の学部の 2 学部構成で、情報系の学部はほぼ全科目がメディア授業で実施されている一方、福祉系の学部は、ブレンディッド型の演習科目が資格取得のために開講されている。学生の約 8 割以上がフルタイムの仕事を持ちながら学ぶ学生で、年齢構成も 10 代から 70 代までと幅広い多様な学生を抱えている。地域もほぼ全国（一部の学生は海外から学習）に分散しており、ほぼ人口比率に沿った分布となっている。

入学時に学生一人一人に専任教員がアカデミック・アドバイザー（AA）として割り当てられ、学生

の履修登録指導、履修上の相談等を実施している。本活動は特に1年生に重点をおき、オンラインや対面・テレビ電話等による同期・非同期の相談・指導を実施している。

4. メンタリングによる学習者支援

学習者の学習の進め方とメンタリングによる学習支援実践を調査する科目は、1年生の主に1学期に履修する導入科目で、オムニバスにより構成され、学習の進め方の基本や、各学部の専門科目のエッセンスを学ぶ科目として配置されており、必修科目で、全員が履修する必要がある。2019年度の1年生は1学期に781名が履修した。各学期のメディア授業受講期間は7週間あり、約15分の動画4本と約30分相当の小テストで合計90分相当の学習を1回と定め、全8回と期末試験で1単位の授業が構成されている。また、本導入科目は最初の週に全回の受講が可能であるが、第1回・第2回の標準受講期間は4週間とし、4週を過ぎて受講すると、遅刻受講とみなされる。遅刻受講2回で1回欠席相当となり、全体の2/3以上の出席が期末試験の受験資格となっている。また、第3回・第4回は5週目までで、以下1週間に2回ずつ、ずれて標準受講期間が配置されている。このような配信形態は、本科目だけの初めての試みで、今年度実験的に取り組んでいる。他の科目では、最初の週に配信されるのは1回と2回のみで、以下、1週間おきに、2回ずつが開講し履修できるように配信される。

この科目に対する学習者支援活動の抜粋は表1に示すとおりである。

表1 学習者支援活動（一部を抜粋）

時期	主体	対象	内容
開始前	指導補助者	科目履修者	挨拶、激励
開始前	専任教員	AAとして担当する学生全員	挨拶、激励
4週目	専任教員	1回も終えていない学生	激励
5週目	職員	ログインしていない学生	激励
6週目	指導補助者	科目履修者	激励
7週目	指導補助者	科目履修者	試験案内、激励

学習者の各週の進捗の平均の推移は図1の通りである。縦軸は進捗の%表示で全8回合計100%となる。学習者は最終評価別にグルーピングしている。但し、評価Dについては、期末試験を受験しているグループ、期末試験を受験していないグループ、また、参考として、最終進捗が0%の学生を除外した評価Dのグループをグラフに掲載した。

5. 考察

1学期の第3週の後半と第4週前半が2019年度の

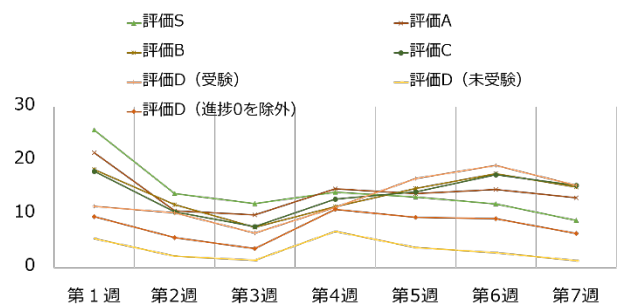


図1 グループ毎の学習者の各週の進捗の平均の推移

大型連休に該当する。また、学期間にわたり同じペースで学習すると、各週約15%ずつで全体をカバーできる。本科目の配信の特性上、最初の週に15%を大きく上回る進捗が、SAB評価の学生に見られる。

表1の4週目の冒頭には教員からの激励メッセージが送られている。このことが影響を与えているかどうかは、最終的には学生アンケート等による調査を実施しないとわからないが、第3週に落ち込んだ進捗を第4週にリカバーしようとして学習を増加させた学生がほとんどであったことがわかる。

上記のように、各学期や暦の状況もみながら、きめ細かい学習者支援活動の計画を策定する必要があると考える。当初は第3週にもう少し学習が進捗すると予想していたが、評価Sを獲得した学生も第3週は少し進捗度が落ちている。また、期末試験を受験してD評価になっている学生の最終平均進捗率は約90%であったので、この進捗率を95%まであげれば、C評価で合格している学生グループとほぼ同等となり、ドロップアウト率の改善が予想される。

6. おわりに

今後は、学習者へのアンケート調査等を通して、学習者支援活動計画を随時修正し、さらなるドロップアウト学生の低減を目指す。また、個別メッセージの自動送信や個人毎のメッセージのカスタマイズ、Chatbotの利用等も検討したい。

参考文献

- (1) リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット：“LIFE SHIFT - 100年時代の人生戦略”，東洋経済新報社，東京（2016）
- (2) 文部科学省：“「人生100年時代構想」推進会議”，http://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2018/20180702.htm（参照2019.06.16）
- (3) 富永 敦子，向後 千春：“eラーニングに関する実践的研究の進展と課題”，教育心理学年報，vol153，pp.156-165（2014）
- (4) Michael Beaudoin et al.，“Online Learner Competencies (The Ibstpi Book Series)”，Information Age Publishing（2013）
- (5) 松田岳士，原田満里子：“eラーニングのためのメンタリング”，東京電機大学出版局，東京（2007）
- (6) 富永 敦子 他：“eラーニング学習者が求めるメンタ資質とは何か”，日本教育工学会第29回全国大会講演論文集，pp.163-166（2013）